特　集

精神分析からみたトラウマの世代間伝達

クラウス・コッヒャー[1]
監訳： 大山泰宏[2]　　翻訳： 大山万容[3]

1.フランクフルト精神分析協会 精神分析家
2.京都大学大学院教育学研究科 心理臨床学講座 准教授
3.京都大学国際高等教育院　非常勤講師

1. 理論編

1) 導入

前世紀にいろんな破局的出来事がありました。戦争、ホロコースト、人種的・民族的迫害、社会的暴力の増加などです。これに加え、DV や虐待、子どもの性的虐待に対する認識が近年広がってきました。こうしたことから、そこに巻き込まれた人々のトラウマという現象、そしてそれがもたらす帰結を理解しようとする関心が広がってきました。この講演では主として、いわゆる「人的災害」の影響と、トラウマ的出来事にさらされた人々が受ける影響についてお話しします。この場合の「人々」とは、個人であったり、集団であったり、さらにはある世代全体であったりします。

トラウマの特殊性は、その知覚構造や感情の中に存在するだけではなく、ある心的領域が崩壊しそれによって象徴化能力が破壊されてしまうような、圧倒的な経験の中に存在しています。トラウマ経験においてその核となるものは、個々の事例がどのようなものであれ、「過剰な」ものであるということです。

この講演ではトラウマ現象をどのように理解できるのかということについてお話しします。まずは、トラウマに関する対象関係論的モデルの発展を示しつつ、早期の関係性が後のトラウマ的出来事にいかに影響を与えるかを主に示したいと思います。したがってまずは、対象関係の心理学に照らしてみたときに、どのようにしてトラウマが子どもの中にできあがるかを一般的な形でお話しし、引き続きトラウマの世代間伝達に焦点を移したいと思います。

トラウマを扱った精神分析の概念の発展を見ようとすれば、まずシャンドール・フェレンツィ(Ferenczi, 1949) の名前を挙げなくてはなりません。フェレンツィは、子どもと養育者のあいだの重要な基本的信頼の関係の中で、トラウマ的出来事がどのように生じうるかを明確に指摘した点で、ジグムント・フロイトの後継者である精神分析家第一世代の中でも際立っています。彼によれば、トラウマが引き起こされるのは、対象そのものとの関係ばかりではなく、子どもと両親の間に内在するコミュニケーションによるといいます。失望、信頼への裏切り、子どもと大人の間に起こったことの否認が、子どものなかに、自分自身の知覚に対する基本的な不信感を生み出します。

マイケル・バリント（Balint, 1969）が精神分析理論に導入したいくつかの概念により、分析家と患

者の分析関係への知覚に、より焦点が当てられる視点がもたらされました。「二者心理学」の概念は、その基底において対象関係を強調するものですが、これはトラウマ的出来事を見るうえで新たな基盤となったのです。バリントは、深い影響を受けたフェレンツィにならい、対象関係がトラウマの基盤にあると記述しました。ある出来事または状況がトラウマにつながるとき、彼の見方では、それは主として子どもとトラウマ的対象との関係性によると考えられたのです。ここで我々は同時に帰結される 3 つの要素を挙げることができます。

1. 子どもは大人に深く依存しており、その二人の間には重要な関係性がある。
2. 子どもが正常範囲で期待しているものに反して、大人が過度に興奮または苦痛をもたらすことをすると、それは圧倒的なものとして知覚される。
3. この出来事の後、その子どもはおおっぴらに拒絶されるか、行動が完全に否定されるか、または突然捨てられる。

このように、トラウマ的出来事は子どもと大人の間の対人関係の中で起こっているのということが明らかになりました。トラウマを引き起こすのは主に物理的な傷ばかりではなく、子どもがそれまで信頼し世話をしてもらっていた大人による裏切りでもあるのです。このように考えると、重いトラウマ的出来事が、内的対象関係を傷つけ破壊させることにつながるだけではなく、保護や安全を与えるために重要な自己と対象表象との内的対話にも深刻な損傷を与えることが理解されます。

トラウマ的出来事の結果として現れるのは、トラウマ経験が密封された心の中の孤島であり、それは正常な内的コミュニケーションから切り離されてしまうのです。これはトラウマ記憶に特徴的な事実です。このことから、密封されたトラウマ記憶はもはや象徴化されることもできず、正常で顕在的な自伝的記憶に統合されえない、ということが説明できるでしょう。トラウマ記憶の格納は身体的感覚や臭覚的、聴覚的、視覚的イメージといった情動的状況の中でなされ、それはフラッシュバックとして現実化（再現）されることがあります。

2）ホロコーストがトラウマ理論に与えた影響

ホロコーストのサバイバーの治療を行った精神分析家は、様々な心身症を診てきました。その中には「慢性的反応性攻撃 chronic reactive aggression」と呼ばれた症状も含まれます。この攻撃性はほとんどの場合自分自身に向けられ、身体化や典型的な慢性的反応性抑鬱を引き起こしました。サバイバーにはしばしば、特別な種類の自己信頼感の欠如や、自己愛的退行の結果として外的世界からの撤退が見られました。

ニーダーランド（Niederland, 1968）はこのような症状を総称して「サバイバー症候群」と呼び、その主たる特徴として、永続的な悲嘆反応と生き残ったことに対する罪悪感を挙げました。生き残ったことそのものが葛藤となり、それが死んだ両親、きょうだい、親戚に対する裏切りとして知覚されるのです。

クリスタル（Krystal, 1968）はトラウマ的出来事の決定的な要因として、内的・外的危機からの逃避

不可能性の重要性を指摘しました。逃げることが出来ないとき、人は自分を救助するために自分自身を捨て、そして急性の離人状態に置かれるのです。逆説的なことに、この情動的麻酔状態（無感覚）ゆえに極めて苦痛の多い感情や生死にかかわるような不安が、あたかも除去されたかのように認知されるのです。この現象を記述するために彼は「ロボット状態」という言葉も使いました。

3) トラウマの世代間継承

1970 年代になると精神分析の研究者は、第二次世界大戦中の強制収容所のサバイバーの子どもたちの治療に取り組むようになりました。このことで、ホロコーストという極めて悲惨な災難が後の世代に深刻な影響を与えていることが明らかになりました。主要な発見の一つは、両親が受けたトラウマが、その子どもたちの人生の「組織化要因」となっているということです(Bergmann & Jucovy, 1982)。「サバイバーコンプレックス」のようなものがあり、それが次の世代にまで無意識的に継承されるのです。

では、トラウマの世代間伝達が生じる心理的プロセスはどのように記述できるのでしょうか？深刻なトラウマを受けた両親は、子どもの成長のための安全な内的な場を可能にするコンテイナー機能を提供する能力が制限されてしまうことは、自明であるように思われます。トラウマを受けた母親は自分自身の不安、憎悪の感覚、失われた対象への愛着、感情麻痺、その他の形の自我退行のために、子どもにほとんど共感することができず、子どもの欲求に関わる情動的な場を十分に与えることや、情動的に映し返すことができないのです。このようにして両親の極度のトラウマが一種の累積的トラウマとして次世代へ伝達されます。その代わり、トラウマを受けた両親は、自分自身で処理することのできない感情や幻想、トラウマによって傷つけられた人格の一部を投影するために、自分たちのコンテイナーとして子どもを必要とします。コンテイナー機能の役割が反転するのは、トラウマ経験を象徴化できない理由の一つでもあります。

両親は、自分の精神構造にそれほど深く影響を与えたトラウマ的出来事を無かったことにしてくれることを、無意識的に子どもに期待します。子どもにとって、これは、彼らの人格の中に内的な心的な場を提供して、両親の受けたトラウマと、トラウマを与えたあらゆる耐えがたい感情とをコンテインしなければならないということを意味します。両親と親密な同盟関係を結んでいるがために、彼は両親を他者（自分と離れたもの）と認識して自分自身の精神の自律性を維持することはできません。ここで二つの無意識的幻想を挙げることが出来ます。

1. 愛する家族の一員が殺され、子どもはその身代わりとして機能する。
2. 子供は無意識の委任状の受取人になる：主な目的はトラウマを与えるきっかけとなった家族の一員の喪失を元通りにすることである。この無意識に委任された幻想と同一化することで、子どもはトラウマを受けた大人の無意識の行為を正当化し、彼らを助け、そうすることで、非常に親密な関係性を永続させようする。この親密性は、自分自身の自律性にとっては有害なものとなる。このため親と子の関係は非常に共生的なものとなる。分離しようとする意図は脅威と感じられ、親の中の古くからある破壊不安を再び現実化させることになる。

親が極度の否認によってトラウマ経験から防衛しようとするとき、子どもは親のトラウマを無意識につかみとり、親の幻想を行動化することによってそれを乗り越えようとします。子どもは無意識に親の身に起こったこと、親が生き延びねばならなかったことを理解しようと務めるのです。親が自分のトラウマを象徴的に処理できなかったため、子どもは親と同一化し具体的な方法でそれを繰り返さなくてはいけません。実際このような子どもは二つの世界を生きることを余儀なくされます。自分自身の世界と、親のトラウマ的歴史に属するもう一つの世界です。この特別な種類の同一化がもたらすのは、自分自身のアイデンティティが人格の断片化という強い傾向を持っていることによる、特別な苛立ちです。

トラウマ的経験の中心には、共感する能力がまったく機能不全になってしまうという事態があることがわかります。自己と良い内的対象との間の疎通性ある二者関係が破綻してしまうために、絶対的な寂しさや絶望感がもたらされます。トラウマ的現実は、内面化された一次対象の保護的能力を破壊するのと同時に、良い対象が永続して内在することに対する基本的信頼感や、人から共感されることを当然のものとして期待する力を破壊します。こうして基本的信頼感が破壊されてしまうことが、進行性の自己愛的な空疎化へとつながるのです。結果として、内面化された共感的他者を失うことで、トラウマについて語る能力が破壊されます。進んで話を聞いてくれるような共感的他者がいる場合にのみ、断片化されたトラウマ的出来事は、形を取り戻し、一貫した語りを構成することができます。トラウマを受けた人にとっては、共感的に聞くことを通して、何が起こったのかを証言してくれる人を探すことがきわめて重要です。このことで、最終的には、トラウマを受けた個人が、自分がさらされてきたトラウマ的体験の断片を一つ一つ象徴化するために必要な自我の機能を回復する可能性が開かれるのです。

これまで私がトラウマの世代間伝達について言おうとしたことを要約するため、次の点を強調したいと思います。

1. トラウマを受けた親には、深刻な共感不全があり、それが愛着関係に障害をもたらす。親は、子どもの人生の中で、親のコンテイナーとしての機能が必要な決定的に重要な時期に、適切に機能することができない。
2. 親のトラウマを修復しようという、子ども自身による能動的な試みがなされる。親あるいは被害者と同一化し、受動的な立場から能動的な立場へと変わることによって、修復が試みられる。
3. 親は自分自身の内的な耐えがたい世界の様相を、無意識的にではあるが能動的に、子どもに対して侵入的に押し付ける。これはほとんどの場合、投影性同一視によっておこなわれる。

私はここまでトラウマ伝達の理論について概説をしましたが、主にその病理的な側面を記述してきたことを、付け加えて強調しておきたいと思います。というのも、ここまで聞けば、トラウマを生き延びた人の子どもはほとんどの場合、深刻な問題を抱えているのではないか、と想像されるかもしれません。しかしそんなことはなく、問題はそのうちのある割合に起こるにすぎません。トラウマを生き延びた人の子どもたちの生育史に保護的影響をもたらすコーピング方略や、レジリエンスの諸相も数多くあって、そのおかげで自分の人生を良い方向に持って行ける人も多くいます。一方で、深い恐怖や対人関係の問

題、社会的な問題に対処していかなくてはいけない人も多くいます。

2. 臨床例

理論的導入を簡単に行ったので、今度は私が精神分析治療の中で会っている患者から、具体的なケースを提示したいと思います。この男性は深刻な抑鬱に苦しんでおり、治療を受けに来ることになりました。主たる症状の一つは、 自分が実際に生きているような感じがしない、ということでした。彼は治療を受けはじめて 2 年と少しが経過しており、週に 3 回の分析を受けています。46 歳で、芸術家として働いています。ここでは、今回のトピックにとって重要な、トラウマの世代間伝達の側面のみを記述するにとどめたいと思います。

彼の両親はいずれも、第二次世界大戦によって人生に深く影響を受けた人たちでした。両者とも戦争に関する出来事後によって深いトラウマを負ったのです。第二次世界大戦中、父親は SS（ナチス体制下で行われた数々の残虐行為の責任者であったナチ党親衛隊）の一員で、ロシアの前線の後方でソビエト軍の供給ルートを攻撃する戦闘団の一員として戦いました。いくつかの攻撃を統率した後、ソビエト軍によって捕えられ、モスクワへ送られ、死刑判決を受けました。ソビエト支配の間、長い期間にわたって特別な役割を果たしたことで悪名高い「ルビャンカ」と呼ばれる監獄の中で、彼は死刑を待っていました。彼は小さな独房に閉じ込められていましたが、冷たい水がひざの高さまで入れられており、部屋の構造上、立つことも座ることもできませんでした。 彼がそこで過ごした期間に、仲間のほとんどはこの監禁状況を生き延びることができませんでした。結局彼は死刑赦免の判断を受け強制労働収容所送りとなり、シベリアの炭鉱で働くことになりました。そこで戦争が終わって解放されるまでの 10 年間を過ごしたのでした。

私の患者の父親は、このような経験については、ほとんど話すことはなく、話すとしてもそれはひどく酔った場合にのみでした。その状況については、「とにかく耐えられない」と表現しました。彼が生き延びることが出来た方法とは、ひたすら、周囲から完全に見えないようにすること、そして監視員に注意を向けられることを何としても避けることでした。人の目に留まり目立つということは、どんな理由によってでも、あるいはまったく理由なしにさえ、恣意的に殺されるということを意味していたからです。この父親が私の患者に仲介した無意識のメッセージは「*人の目に留まるな。さもないと命が危ない。存在しないようにふるまうことでしか、生き延びることはできない。*」というものでした。

患者の母親は、戦争中に東プロイセンから西へとソビエト軍から逃れてきました。そのためには凍てついたバルチック海を超える必要がありましたが、逃げる群衆に向かってソビエトの戦闘機が火を噴きました。彼女はもともとシャイで、引きこもりがちな性格であったため、一人で逃げていました。戦闘機はもっぱら群衆を標的に攻撃したために、彼女は逃げ延びることができたのです。こうして彼女は生き延び、ベルリンに到着し、そこで戦争が終わるのを待ちました。彼女が私の患者に与えた無意識のメッセージは、「*一人でいなさい、人に近づいてはいけない。他人と一緒にいると、命があぶない*」というものでした。

私の患者の極度な社会的ひきこもりや、深刻な抑鬱、そして何よりも本当には世界に属していないような感覚は、両親が受けた深刻なトラウマ体験の無意識的な世代間伝達の一部として見ることができます。そのトラウマは、両親が自分自身では消化し、処理することができなかったものです。

セッションの大部分の間、彼は自分にぴったりの場所を見つけることができないということを具体的に行動として示していました。彼は、カウチに横たわっていることができなかったのですが、それは自分の後ろに自分のコントロールできない私がいることに恐怖を感じるからでした。また、カウチに横たわることができたとしても、起き上がってカウチに座り、私の姿を見てからまた横たわる、ということも何度かありました。

彼の転移は、深い不信感に影響されていました。彼は、私が本当に彼の人生の経験を共有することに興味を持ち、彼と意義のある関係性を構築することに興味を持っているとは、想像できなかったのです。長い間、彼はセッションの間の休みを、彼の中の私の存在や私の影響を無効にするために利用せざるをえませんでした。彼は私が彼に与えた影響のことを「洗脳」と呼んでいましたが、これは私が彼にとって意味のある存在となる可能性が無かったということを表現しようとしていたのです。

彼の社会的な接触も同様の形をとっていました。彼はいつも一人で仕事をし、彼の作品が展示される公共のイベントを避けていました。彼の演出した芸術作品も、ある意味では、両親の閉じ込められたトラウマ的出来事を、両親が彼に渡してきた潜在的メッセージを、いかに彼が処理してコンテインしようとしているかを表しています。 彼は友人を持たず、女性とは親密になり始めるとすぐに関係を終わらせていました。関係が親密になると、強い恐怖感や窒息の恐怖さえ感じてしまうのでした。実際、彼は自分の人生を、ある種の独房の中で完全に独りでいるようだと記述しました。

これまでにセッションをしてきた長い間、こうしたことを彼は頭でははっきりと理解していましたが、それは彼に何の感情ももたらさないでいました。彼は両親のトラウマの中に捉えられ、それを自分の人生の一部であるかのように繰り返さなくてはならないように見えました。徐々にではあれ、多少の変化が起こり始めるにしても、彼が進展するあらゆる歩みには、ほとんど耐えがたいまでの不安が伴いました。

何に恐怖を感じるのかについてイメージしてみるように促すと、彼は言いました、「もし自分が本当に自分の人生を生きるようになったら、加害者になってしまうかもしれない、それが本当に恐ろしいのだ」、と。ちょうど戦時中にロシアで多くの人々を殺した父親のような、ナチの殺人者みたいになるのが恐ろしいと。親密な関係性から退却する隠れ場所の断念を想像すると、父親または母親と完全に同一化してしまうという呪縛が生じてしまうのでした。両親の運命を、彼は親密な接触を避けることで繰り返さなくてはならなかったのです。これまでのところ私たちは、患者の両親に何が起こったのかということを情緒的に理解することを試みながら、両親の体験を見ていくというプロセスを継続しています。そこで両親は加害者でもありましたが、被害者でもあったのです。その目的は、彼の両親によってもたらされ、彼があたかも自分の人生の一部であるかのように完全に同一化した自分の両親の運命から、よりいっそう情緒的な距離を取ることを助けることができるような語りを構築することです。

さて初めに私の患者は芸術家であると申し上げました。どんな種類の芸術だろうと思われた方もいらっしゃるかもしれません。もしかすると、彼のトラウマがその芸術を通して表現されているのではないかと。

まさにその通りであると私は思っています。彼は主に、観客を積極的に巻き込むような、ある種の技術的な仕掛けを作る仕事をしているのです。彼の目的は、観客に、彼の作った芸術作品とインタラクトさせることにあります。例えば、観客の動きや音を、電源につないだ仕掛けで増幅させるといった技術などです。その結果、彼の作品を観る人は、野外または大きな部屋に設置された彼の芸術作品に影響を与えることができるわけです。観客は、自分自身が動くことで色を変えたり、動きを演出したりできます。この相互性こそが彼にとっての課題なのです。私が見るところ、彼はこれまでに何度も、自分を共感的な方法で映し返してくれるような、一次対象との対象関係への深い無意識の願望を再現し続けています。

参考文献

Balint, M. (1969). Trauma and Object Relationship. *International Journal of Psycho-Analysis*, **50**:429-435.

Bergmann, M.S., &Jucovy, M.E. (1982). *Generations of the Holocaust*. New York: Basic　Books, Inc.

Ferenczi, S. (1949). Confusion of the Tongues Between the Adults and the Child. *The International Journal of Psycho-Analysis*, **30**:225-230.

Krystal, H. ed. (1968). *Massive Psychic Trauma*. New York: Int. Univ. Press.

Niederland, W.G. (1968). Clinical Observations on the "Survivor Syndrome". *International Journal of Psycho-Analysis*, **49**:313-315

※ 解題

本テクストは、2013 年 5 月 15 日に開催された、クラウス･コッヒャー(Klaus Kocher)氏による講演 Trans-generational Aspects of Trauma: Psychoanalytic Perspective の邦訳である。この講演は、平成 23～25 年度　科学研究費補助金基盤(B)「精神力動的心理療法家のトレーニングに関する開発的研究ー･国際比較調査を通して」(研究代表者：松木邦裕)　の補助を受けて行われた。

Klaus Kocher, M.D. は 1953 年生まれ。ドイツ･フランクフルト精神分析協会（Frankfurter Psychoanalytish Institute）所属の精神分析家、精神科医である。フランクフルト大学医学部卒業後、精神科医として活動しつつ、精神分析家の資格を取得した。精神分析に、さまざまな心理療法の理論・技法を取り入れた実践をおこなっている。米国でも訓練を受け、AAI（成人愛着面接）認定コーダー、カップルセラピー・セラピストとしても認定されている。現在はフランクフルト精神分析研究所の中心メンバーとして、臨床実践、後進の指導にあたりつつ、中国を初めとするアジア諸国での精神分析の普及に尽力している。

ナチスのホロコーストの記憶を抱えるドイツでは、心理療法･精神分析をおこなうにあたって、トラウマの集合的記憶、世代を超えた記憶の無意識的な伝達という観点は、無視できないものである。この講演では、トラウマの世代間伝達に関して、特定の理論的立場に偏ることなく、基礎的かつ重要な事柄が

平易に講じられている。

日本においても、個人の心理的問題の背後に、実は第二次世界大戦での破壊と傷つきの記憶が、集合的に世代を超えて伝達されていると思われる事例は決して少なくはない。しかし、戦争を直接体験した世代は、そこでの悲劇を黙して語らぬことも多く、また戦後の民主主義のもと戦争責任が新しい世代によって糾弾される中、ますます記憶は心の奥に凍結されてしまった。

夏の風物詩である花火大会は、戦争の記憶と深く関係しているように思われる。戦後、各都市では、死者が還ってくるお盆の時期、原爆投下や終戦記念日の時期、花火大会が盛んにおこなわれた。第二次世界大戦時には、空からヒューヒュー音を立てて空から落ちてくる焼夷弾が、日本の本土を焼き尽くした。日本の 200 以上にものぼる都市が灰塵と化し、少なくとも 30 万人以上もの民間人の命が奪われた。ここに原爆と沖縄地上戦の民間人犠牲者の数を加えると、死者の数はこの 2 倍となる。兵士の数も加えるならば、日本の人口の 30 分の 1 以上の約 310 万人が亡くなった。いまだにその正確な数は、計り知れない。戦争の記憶に向かい合う夏の時期に、地から空へ向けて打ち上げられる花火は、焼夷弾と同じくヒューヒューと音を立て、地から空へと大きな爆音とともに花開く。それは戦争の記憶の再現であるとともに、その記憶の昇華であろう。空襲を反転させ、死者に対して、そして生き残った人々の記憶に対して、捧げられる散華であろう。

私たちが今でも花火に深く心を動かされるとしたら、それは、私たちに伝達されている戦争の記憶に私たちが取り組もうとしているからかもしれない。直接の記憶の証人は、年を追うごとに少なくなっていく。私たちは、過去の世代から何を託され何に取り組むべきなのか、今こそ、沈黙の声にならない声からの問いかけに耳を傾けていかねばならない。

なお、本講演には臨床事例が含まれているが、Web 公開にあたっては、コッヒャー氏からの快諾を得ている。一般に公開されることに対して十分に配慮がなされ記述された事例であることを申し添えておく。

(大山泰宏)